

ラドヤード・キプリング

7 戦艦クランパダウン号のバラッド

この詩はもともとセント・ジェームズ・ガゼットに書いた作り話で、未来の海戦はネルソン提督の海戦にならって、敵艦乗り込みなどを含む船戦ふないくさスタイルになるだろうと信じたある通信員の手紙にヒントを得たものである。何かの偶然で始め真面目な記事と受け止められ、その上、作者の記憶が正しいとすれば、カンタータとして曲が付けられたりした。この事実はこれまで説明していなかった。

わが戦艦クランパダウン号は
英仏海峡をわがもの顔に席捲してきたものだ
だからハッチはきっちり閉じて
陽気な海峡に荒波が立つときは
船酔いで青ざめた海兵さんを守ったものだ 5

わが艦は 百トンもの船首砲を装備し
おまけにでかい船尾砲も装備していた
風唸る波をまともに食らうと
二門の筒先は前のめりに 海中に突っ込み
ついでにワイヤをぶっちぎり 舷側の柱を倒す始末 10

わが戦艦クランパダウン号は
旧敵の軽巡洋艦に遭遇した
しゃれたオッチキス機関銃を備え
おまけに逃げ足だけはまっこと速く
接近戦となると すたこら逃げるすばしこいやつ 15

わが艦は 七マイル接近し砲火を開いた
まるで浮き沈みするコルクの栓を狙うようなもの
一発ぶっぱなし 二発目もお見舞いしようとした
その二発だけで船首砲は だらりと萎えちまった
まるで茎の上でうなだれる百合の花 20

「艦長 船首砲は役立たずになっちまったであります

「甲板の梁^{はり}の下部が やられたであります
「一、二時間 一服しましょうよ
「破れた鋼板を 修理しましょうよ」
艦長は答えた 「そうせい」 25

一マイルまで接近したわが艦は砲撃を再開した
まるで空飛ぶカモを狙うよう 当たるものかは
船尾砲は 正々堂々けなげに応戦した
だが船首が大空に向けてのびあがるや
船尾砲は波をかぶって 鳴りをひそめた 30

「艦長 砲塔は蒸気がたちこめております
「下の蒸気送管が破裂したためであります
「壊れた蒸気ポンプの悲鳴が聞こえませんか
「ねじれた砲の回転台がきしんでいるのが聞こえるでしょう」
「艦を旋回させて 進め」 35

わが戦艦クランパダウン号は
むっつりと船体を左右にゆすり
船首を直角にして 相手の砲撃をかわそうとした
さながら極寒の北極海で
シロイルカがオナガサメの急襲に立ち向かうよう 40

「艦長 敵弾はつぎつぎに着弾するであります
「戦友もつぎつぎに倒れるであります
「ジョングル魂にもとりまさあ
「こんなオンボロ軍艦の中で やられっぱなしは
「敵さんには こっちの被害など分かりやしません」 45

「者ども 投げ出されぬよう 身を伏せろ
「敵艦の舷側に横付けするぞ
「衝角で相手のどてっばらに大穴も開けられない 逃げ足が速いやつだから
「それとも もう一発船尾砲をぶっぱなして
「熱い蒸気にただれて 犬死するか」 50

わが戦艦クランパダウン号は
装甲鋼板で武装はしていたが

それも船首船尾に たったの五十フィートだけ
あとは雌ブタの腹みたいに ぶよぶよの赤裸
ノルデンフェルト機関砲の 雨霰にゃ勝てはせぬ 55

「艦長 敵は我らを切り刻んでおります
「敵の冷硬鋼の遊底は素早いであります
「石炭は海に流れてすっからかんであります
「敵のりゅう散弾が石炭庫に炸裂したであります」
「そのまま 流されて行け」と艦長 60

わが戦艦クランパダウン号は
潮に乗り ぐるりと向きを変えた
二門の大砲は押し黙ったまま 南北ににらみをきかせるのみ
血潮と泡立つ蒸気は どっとばかりに流れ
艦はゴリゴリと敵巡洋艦の舷側をこすった 65

「艦長 敵が叫んでいるであります 『参ったか観念しろ』と
「敵は 降参の印に艦長の刀を寄越せと 言っているであります」
艦長は答えた「敵艦の船首船尾をしっかりとつかまえろ
「俺の刀を寄越せだと そんなに欲しけりゃ 呉れてやらあ
「者ども ドスを抜け 乗り移れ」 70

わが戦艦クランパダウン号は
四百名の海兵を どっとばかりに吐き出した
火ぶくれになった火夫たちは 歓声をあげた
火夫たちは艦のど真ん中をよろよろ歩き 修羅道の雄たけびを聞いた
そして四方鋼鉄の壁の軍艦の上で 欣喜雀躍した 75

味方は敵巡洋艦を端から端まで乗っ取った
艦橋から船倉にいたるまで
味方はネルソン提督の艦隊のごとく戦ったのだ
上半身裸で靴も履かず裸足のまま
古^{いにしえ}の戦の時のように 80

わが戦艦クランパダウン号は沈み行く
壊れた舷側を上にあげ
鋼でできた百万ポンドの巨体は沈んで行く

果てはタラの餌食か 死体をむさぼる大ウナギの餌食か
あわれ英仏海峡の潮の流れのなかへと沈んで行く

85

わが戦艦クランパダウン号の乗組員は
意気揚々と波浪を突き進んだ
旧敵からぶんどった軽巡洋艦に乗って
古の誉の日々のごとく
未来永劫の栄えの日々のごとく

90

(榊井幹生訳)